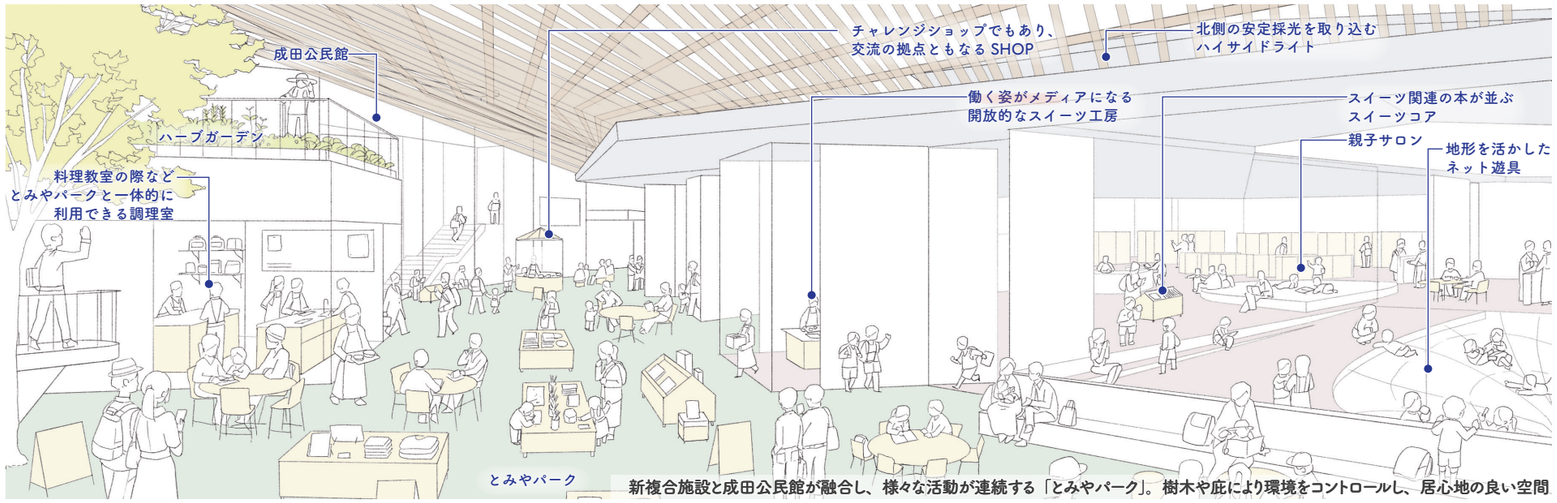
学び合い・育み・つくる、私たちの新しい「ふるさと」

- とみやパークがつくる新図書館等複合施設と成田公民館のつながり、新しい融合を生み出す市民社会のパレット -



新複合施設と成田公民館が融合し、様々な活動が連続する「とみやパーク」。樹木や庇により環境をコントロールし、居心地の良い空間

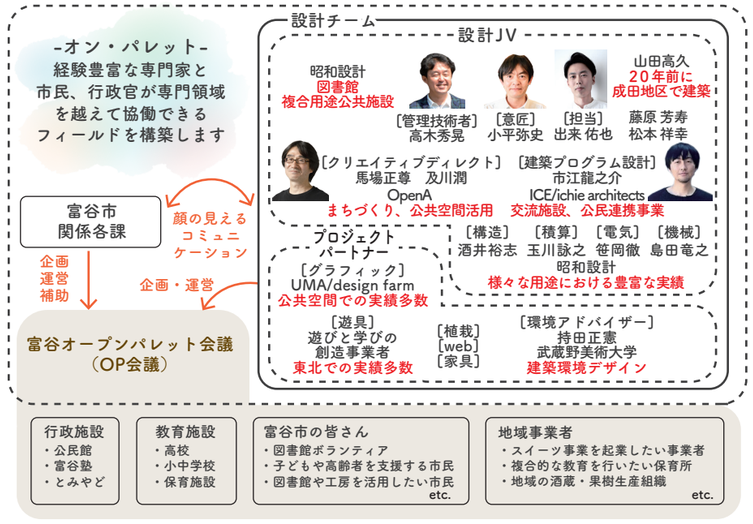
取組みの体制・チームの特徴

新図書館等複合施設整備に関わる市民・富谷市・近隣事業者の全てを巻き込む、富谷オープンパレット会議（OP会議）を企画・運営します

・OP会議とは、能動的な市民や事業者が、アイデアや具体的に行いたいことを持ち込むための機会と仕組みです。企画や運営に関わりたい人たちが、その内容を公開の場でプレゼンテーションし、参加者・富谷市とともにアイデアの実現を検討します。

[OP_0] 9月中旬	[OP_1] 10月上旬	[OP_2] 12月上旬	[OP_3] 3月上旬	実施設計以降
プロポ案 意見交換会 <A.レクチャー> 新施設の これまでの経緯 <B.プレゼン> 設計チームからの プロポ案の説明 <C.ミーティング> 基本設計での 課題点の抽出	新施設でどんな ことをしたい？ <A.レクチャー> 目指すべき 施設像とは？ <B.プレゼン> ・小中高生/大学生 ・社会人 ・子育て世代 ・高齢者 <C.ミーティング>	新施設とどんな 関わりを作りたい? <A.レクチャー> まちづくりにおける 役割とは？ <B.プレゼン> ・富谷塾 ・とみやど ・地元スイーツ店 ・地元生産者 etc.. <C.ミーティング>	基本設計報告 意見交換会 <A.レクチャー> これまでの OP会議の総括 <B.プレゼン> 設計チームからの 基本計画の説明 <C.ミーティング> 実施設計での 課題点の抽出	[OP_4] 家具を考える [OP_5] サインを考える [OP_6] 備品を考える [OP_7] 新施設の使い方 [OP_8] 家具製作
<共有> 9月下旬 リモート図書館	<共有> 11月上旬 リモート図書館	<共有> 1月中旬 リモート図書館	<共有> 3月下旬 リモート図書館	随時共有

webやチラシでOP会議の内容共有を行ないます。また、ネットワーク型図書館の社会実験である屋台本棚を用いたリモート図書館もOP会議の1つのメディアとして活用します。



OP会議を重ねるごとに、施設に関わる人々のネットワークが形成されます。設計段階から市民の自発的なコミットメントにより育まれる意思決定プロセスを経ることで、オープン後の運用につなげていきます。

豊富な実績と多角的な視野をもつ設計チーム

・図書館や複合用途公共施設設計の実績が豊富な事務所が主体となり、クリエイティブ施設や図書館基本計画、公共空間活用の実績が多い事務所との設計チームを構成することで、多様な視点から業務を進めます。

地域を巻き込んだ公共空間の活用やまちづくりの実践

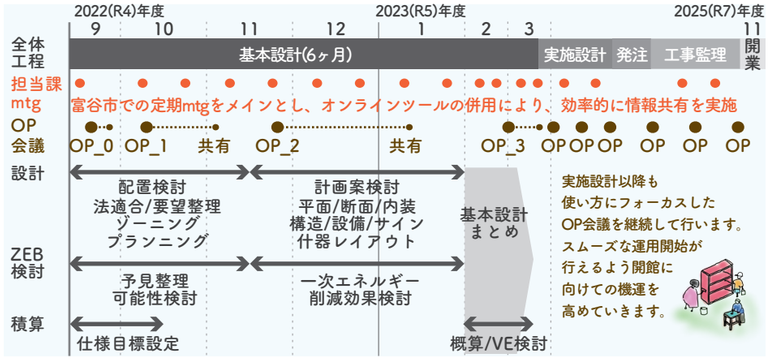
・公共空間の活用や公民連携の知見や実績が豊富です。
OP会議を通じて、キープレーヤーとなる市民や地域事業者を巻き込む設計プロセスを行ないます。また、開館後の運営をサポートする利用者コミュニティづくりのプロセスも同時にサポートします。

豊富な公民連携の知見によるクリエイティブ組織体制の提案

・直営図書館、スイーツステーション、児童遊戯施設と性質の異なる3つの機能がクリエイティブに融合するためには、運営組織のデザインが重要だと考えます。これまで数多くの公民連携事業に携わっている経験から、適切な運営体制の提案や構築のサポートを行います。

開館までのスケジュール

段階的なOP会議と設計工程により、市民とつくりあげるプロセスを実施



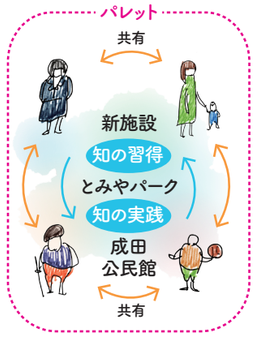
特に重視する設計上の配慮事項

富谷市が将来ビジョンである「住みたくなるまち日本一」となるために、新施設において重要なことは、富谷市の既存ポテンシャルを最大限活用し、市民活動の広がりによりそれらを融合し、市民とともに成長していける建築であることだと考えました。
その命題を「学び合う」、「育む」、「つくり出す」という3つの方針により実現します。

① 学び合うコミュニティ

・新図書館等複合施設と成田公民館を融合する
新施設と成田公民館の間に「とみやパーク」を計画し、2つの施設が融合した学びの場である「パレット」を提案します。

・まちづくりの場となる「とみやコモンズ」
成田公民館のプレイルーム跡に「とみやコモンズ」を提案します。まちの情報や出来事が集まり、発信する役割を担うことで、自分たちの住んでいる地域について学び・考えるきっかけを生み出す場所となることを目指します。

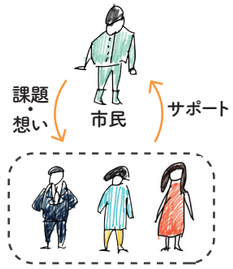


② 「やりたい」を育む土壌となる

・やりたいを実現するゲートウェイ
OP会議などにより、地域のキーマンや近隣施設・団体などと連携する下地を形づくります。市民が何かを実現したいという想いをサポートできるよう、貢献欲のある人たちと出会うことができる体制や場所を構築します。

・誰ひとり取り残さない、ネットワーク型施設
富谷に暮らすあらゆる市民にサービスを提供できるよう、ネットワーク型図書館の社会実験を行い、設計に反映します。

・ZEB化の実現
ゼロカーボンシティとSDGs社会の実現の為、ZEB化を目指し、地域への波及を考えたモデル建築とします。

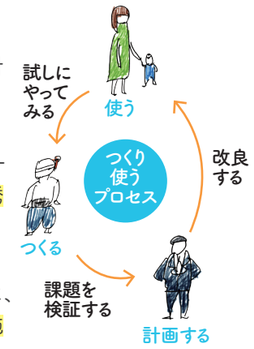


③ つくりつつ、使いつつの循環を生み出す

・ともにつくり、使うを考える設計プロセス
OP会議を通して、建築をどう使うかを一緒に考え、設計に活かすプロセスを実現します。

・市民がつくり込める建築
光環境や空気環境で場所を規程する、おおらかなワンルームの建築とすることで、使い方を決めすぎず、可能性を誘い・許容する、活動の手がかりに溢れる計画を行います。

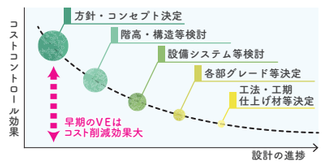
・まちのキーマンが横断的に関わる運営体制
複合施設がポテンシャルを最大限発揮し続けるために、OP会議で発掘したまちのキーマンが各機能を跨いで施設運営に関わることのできる体制の構築をサポートします。



設計だけでなく、事業全体の遂行に配慮したコスト管理

設計初期段階からのコストコントロール

・建設コストは基本設計初期段階で8割が決定するため、影響の大きい躯体コストや設備コストを重点的に比較し、経済的で高品質な設計を徹底します。



建設資材コスト・納入状況の動向を反映した段階的概算

・概算工事費の確認タイミングを複数回設け、事業の後戻りを防ぎます。
・冷間プレス鋼管（BCP）や分電盤・電子部品など、継続して納入状況が不安定な資材情報を把握し、事業スケジュールに対する影響を検討します。
・安定供給されている材料を主に使用した設計とします。